東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

フランスのヴィレット音楽都市における聴衆への音楽教育およびフランスのアマチュア音楽活動について

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1998-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/777

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

フランスのヴィレット音楽都市における聴衆への音楽教育およびフランスのアマチュア音楽活動について

成　田　和　子

はじめに

パリの北東部19区にある巨大な公園ヴィレット・パーク《Parc de la Villette》には，北側に科学と商工業の都市《Cité des Sciences et de l'Industrie》と，南側に音楽都市《Cité de la Musique》が広がる。ヴィレット・パークの構想が持ち上がったのはヴァレリー・ジスカール＝デスタン大統領時代の1977年のことであり，その後，政権交代の波にもまれたりしたが，約18年の歳月をかけて完成に至った。フランスの国家的な大プロジェクトである。音楽都市の設計を担当したのは建築家クリスチャン・ド・ポルヅァンパルクであり，音楽都市全体（内部も外部も集合としても）を“音”を意識した建築構想でまとめている。楽器のフォルムを連想させる建物や庭園など，イマジネーションをかきたてられるものが多い。1995年12月に，当時のフランス大統領フランソワ・ミッテランが落成式挙行者となり，音楽都市は活動を開始した。そして音楽都市は，美しいモニュメントとしての存在を評価されるよりも，“音楽教育”と“音楽の伝播”のために，いかにその都市機能を発揮できるかが評価されていくこととなった。3年前に音楽都市を訪ねた時に，音楽都市の活動の指針となっているコンセプトを解りやすく語ってくれる都市の責任者と会うことができた。音楽都市は“未来の専門家”《futures professionnels》と“未来の聴衆”《futures auditeurs》を育てるために働いていることを具体的に示してくれたのであった。未来の専門家を目指す者への音楽教育は，最新の設備を整えたパリ国立高等コンセルヴァトワールに任されているといえよう。しかし，私がより興味を覚えたのは，未来の聴衆への音楽教育についてである。未来を想定して活動する音楽都市の分析を試みる。

もう一つ並行して掘り下げてみたいことに，フランスのアマチュア音楽活動がある。フランス文化省総務局のリサーチに，『フランス人の文化的な生活の楽しみ方は大きく分けて二つあり，一つは職業的な芸術活動の産物を消費すること，もう一つはアマチュア芸術活動に参加することであろう。後者については話題にのぼることが少ないが，フランス国民の15歳以上の約半数が何らかの芸術活動を経験し，約4分の1が余暇活動として継続している』というデータがある。音楽，演劇，舞踏，文学，造形美術など多様な分野でアマチュア活動が行なわれてい

るが，音楽において，鑑賞する側に回るだけではなく，自らが音楽活動に携わることによって文化的な生活を楽しむ方法があるわけである。合唱や器楽など音楽におけるアマチュア活動の特色，およびアマチュア育成のシステムなどについての考察を試みる。

ヴィレット音楽都市

53200m² の敷地を有するヴィレット音楽都市は，音楽および舞踏に関連する多様なセクターを集合するという構想で実現された。3つのコンサート・ホールを有するパリ国立高等コンセルヴァトワール（1990年オープン），可動式大ホール（1995年オープン），音楽ミュージアムとミュージアム円形劇場（1997年オープン）の他に集合されたセクターは，一般向けの音楽と舞踏情報センター，教育メディアテック（音楽および舞踏資料館），専門家のための音楽ミュージアム資料研究センター，現代音楽資料センターの4つの資料館とガムラン音楽アトリエなどである。それ以外に，現代音楽の最前線で活躍するアンサンブル・アンテルコンタンポランが本拠地を与えられ，音楽学生寮や音楽図書店も併設されている。すべてが音楽ずくめである。セクター間のインタラクティヴな関係が期待されたと言ってもよいであろう。しかしここまでは，建物（箱）を造り，多様なセクターを集合させるということで，音楽に限らず，どこでも試みられていることである。では，音楽都市が誇る音楽教育と音楽伝播のコンセプトとはどのようなものだろうか。最初に音楽都市総長ブリジット・マルジェ氏の文章をまとめてみる。

『音楽都市の基本的な構想は，ヴィレット・パーク内に，音楽教育と音楽の伝播のための施設を統合することにあった。なぜかというと，現代において，教育環境を塀で囲んでしまうということは間違いであることが明らかだからである。しかし現在において，音楽という職を手につけるためのコンセルヴァトワールと，コンサートなどのプロフェッショナルな環境とが隔絶していることがほとんどである。音楽都市のプロジェクトは，音楽における教育環境とプロフェッショナルな環境との間に，活発な流通を起こさせるというアイディアが基本となっている。クルスチャン・ド・ポルヅァンパルクの音楽都市設計案が音楽都市設計コンクールで勝利を収めたのは，コンセルヴァトワール，音楽ミュージアム，可動式ホール，音楽や舞踏に関する資料センターや音楽協会など多様なセクター間の交流を，設計の基本構想としていたからである。音楽都市の総合プロジェクトは，学んでいる若いジェネレーション，第一線で活躍するプロフェッショナルなアーティスト，そして聴衆という3つのカテゴリーを結合することにあった。また，様々な聴衆が，色々な方法で音楽を惜しみなく堪能できるようにすることにもあった。つまり，可動式大ホールで催されるショーやコンサートだけではなく，教育環境であるコンセルヴァトワールや音楽ミュージアム円形劇場で行なわれるイベントなどを通して音楽に親しんだり，あるいは4つの資料館において音楽に関する情報や資料，文献などを通して音楽に接したり，あるいは音楽ミュージアム（入場者は入り口でワイヤレス・ヘッドフォンを受取り，装着してミュージアム内を歩くと，ヘッドフォンから展示に応じた音楽と解説が聞こえて

くるシステムを取り入れており，観るだけではなく聴くミュージアムでもある）で音楽史に触れたりコレクションの楽器を観たり聴いたりすることなどである。聴衆に対して，音楽へのアクセスの扉をできるだけ数多く開くことが，音楽都市の任務なのである。』

マルジェ氏の言葉から，まず理解できることは，フランスにおける音楽の社会的重要度の高さであり，音楽都市はそれを象徴しているとも言えよう。音楽都市の特色を項目に分けて見てみる。

（1）音楽都市におけるイベントの多様性と方向性について

音楽都市のイベントを通して紹介される音楽は，ポピュラー音楽から博識な音楽と言われるものまで，古き時代から現在まで，そして東洋から西洋まで，あらゆるジャンルと時代と地域の音楽がある。しかし，これらの多種多様な音楽をどのように紹介していくのか，イベントの数や種類が多いだけでは，単にバラエティーに富んでいるだけである。1996年10月から1999年7月までの音楽都市のプログラムを分析してみると，まずテーマによるプログラミングが行なわれていることがわかった。主要なプログラム・テーマをあげてみよう。

1996年10月から1997年8月までのシーズンにおいては，「古典派時代」「ハンガリーの音楽」「アコーデオンのテリトリー」「ジャズ」「アンダルシア地方の音楽」「アンサンブル・アンテルコンタンポラン20年祭」「音楽のマエストロ（世界のフルート）」「コンセール・スピリテュエル」「子供のためのコンサート」「クロード・ドビュッシーのピアノ音楽」「ルネサンスのポリフォニー」「ロバート・シューマン」「ヴァイオリンにおけるヴィルテュオーゾ」「ヨーロッパ室内オーケストラ」「アトラス山脈のベルベル音楽」「室内合唱音楽」「ポルトガルの音楽」「ヴィレット・ジャズ・フェスティヴァル97」など。

1997年9月から1998年7月までのシーズンにおいては，「声と20世紀」「バロック・オペラのすべて」「アフリカの声」「大発明（楽器の発展）」「アメリカ（ミスター・エリントンに捧ぐ，アメリカのパイオニア達，ベッティー・カーターのジャズ，ニューヨークのマラソン：戦後のアメリカ音楽，メイド・イン・アメリカ，アメリカのお伽話と夢物語，ルシンダ・チャイルドのア・ラ・カルト，ソウル・ミュジック，ゴスペルとブルースとテックス・メックス，アメリカの交響曲，映画と音楽，ジョージ・ラッセル，ジェーン・アンダーソン：ブロードウェイからパリまで，ジャズ，レナード・バーンスタイン）」「ヨーロッパ・バロック期に一斉を風靡したイタリア調」「ライジング・スター（カーネギー・ホールの新進アーティスト）」「マルセイユを舞台に（マルセイユの音楽の昨日と今日）」「作曲家とその時代（早出な音楽作品）」「ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル」「フライブルガー・バロック・オーケストラ10年祭」「フランスの伝統的な音楽と舞踏」「チャイコフスキーを体験」「ユーリ・バシュメットのア・ラ・カルト」「オルガン音楽」「カルルハインツ・シュトックハウゼン」「フランスのクラヴサン音楽」「ロンドン交響楽団」「音楽と空間」「リュートのための音楽」「キューバの音楽」「ヴィレット・ジャズ・フェスティヴァル98」など。

1998年9月から1999年7月までのシーズンにおいては，「中国の3つの宗教における音楽」「ガーシュイン・ノンストップ」「青少年のためのコンサート」「ピエール・ブーレーズ」「ピエール・シェフェールに捧ぐ」「GRM音楽研究グループ40年祭」「シュロモ・ミンツ」「19世紀の弦楽器製作の大家ヴュイローム：ヴァイオリン」「中央アジアの音楽と舞踏」「オリビエ・メシアンに捧ぐ」「ジャズ・ナショナル・オーケストラ」「聞き覚えのあるメロディー（映画のテーマ音楽）」「ミョン・ファン・チョンとヨーロッパ室内オーケストラ」「ライジング・スター（カーネギー・ホールの新進アーティスト）」「サルディニアとコルシカの声楽音楽」「中世の音楽」「クリーヴランド管弦楽団」「ウイリアム・クリスティー指揮：リュリ，パーセル」「ナポリの音楽ポートレート」「聴くための音楽と踊るための音楽」「ヨハン・ゼバスティアン・バッハ」「歌．伝統．革新」「ブラジルの音楽」「大河の言葉：中央アフリカ共和国の音楽」「ベートーヴェンを体験」「20世紀の音楽アカデミー」「ヴィレット・ジャズ・フェスティヴァル99」など。

上記にあげた以外に，音楽都市内に本拠地を持つパリ国立高等コンセルヴァトワールやアンサンブル・アンテルコンタンポランや，著名な演奏家や団体によるコンサートが多数企画されており，シーズン中の音楽都市は眠ることがないに等しい。またプログラム・テーマからは，世界のあらゆる時代とあらゆるジャンルの音楽のイベントが行なわれていることがわかる。まるで音楽の縁日のようである。次に，数あるプログラム・テーマの分類を試みてみる。

①「古典派時代」「ルネサンスのポリフォニー」「ヨーロッパ・バロック期に一斉を風靡したイタリア調」「中世の音楽」などは，時代やその時代の特徴に焦点を合わせたものである。

②「ハンガリーの音楽」「アンダルシア地方の音楽」「アトラス山脈のベルベル音楽」「ポルトガルの音楽」「アフリカの声」「マルセイユを舞台に（マルセイユの音楽の昨日と今日）」「フランスの伝統的な音楽と舞踏」「キューバの音楽」「アメリカ」「中国の3つの宗教における音楽」「中央アジアの音楽と舞踏」「サルディニアとコルシカの声楽音楽」「ナポリの音楽ポートレート」「ブラジルの音楽」「大河の言葉：中央アフリカ共和国の音楽」などは，地域や国に焦点を合わせたテーマであり，その数はかなり多い。これらはさらに，その地域や国の伝統音楽や民族音楽，特有の音楽的傾向に焦点をあてたテーマなどに分けることができる。

③「アコーデオンのテリトリー」「音楽のマエストロ（世界のフルート）」「ヴァイオリンにおけるヴィルテュオーゾ」「大発明（楽器の発展）」「オルガン音楽」「フランスのクラヴサン音楽」「リュートのための音楽」「19世紀の弦楽器製作の大家ヴュイローム：ヴァイオリン」などは，楽器に焦点をあてている。

④「声と20世紀」「バロック・オペラのすべて」「室内合唱音楽」「コンセール・スピリテュエル」「ジャズ」「聞き覚えのあるメロディー（映画のテーマ音楽）」「聴くための音楽と踊るための音楽」「歌．伝統．革新」「ヴィレット・ジャズ・フェスティヴァル（97/98/99）」などは，音楽のジャンルやスタイルに焦点をあてている。

⑤「ロバート・シューマン」「クロード・ドビュッシーのピアノ音楽」「ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル」「カルルハインツ・シュトックハウゼン」「ヨハン・ゼバスティアン・バッハ」「ガー

シュイン・ノンストップ」「ピエール・ブーレーズ」「ピエール・シェフェールに捧ぐ」「オリビエ・メシアンに捧ぐ」などは，作曲家に焦点をあてており，時には近年に没した作曲家に敬意を表わしている。

⑥「アンサンブル・アンテルコンタンポラン20年祭」「フライブルガー・バロック・オーケストラ10年祭」「GRM 音楽研究グループ40年祭」などは，ある音楽的傾向の追究と普及に努めてきている音楽団体の歴史的な活動を記念している。

⑦「ヨーロッパ室内オーケストラ」「ユーリ・バシュメットのア・ラ・カルト」「ロンドン交響楽団」「ジャズ・ナショナル・オーケストラ」「ミョン・ファン・チョン指揮ヨーロッパ室内オーケストラ」「ライジング・スター：カーネギー・ホールの新進アーティスト」「クリーヴランド管弦楽団」「シュロモ・ミンツ」「ウイリアム・クリスティー指揮：リュリ，パーセル」などは，指揮者やソリスト，演奏団体に焦点をあてている。（このタイプのイベントは，上記以外に多数企画されている。）

⑧「子供のためのコンサート」「青少年のためのコンサート」「チャイコフスキーを体験」「ベートーヴェンを体験」「20世紀の音楽アカデミー」などは，若いジェネレーションを対象とした音楽教育的な効果をねらったテーマと考えられる。

⑨「作曲家とその時代（早出な音楽作品）」や「音楽と空間」などは，音楽学的なテーマであると考えられる。

①から⑨は音楽都市のイベントにおけるプログラム・テーマの大まかな分類であるが，それぞれのプログラム・テーマは，時代，地域や国，楽器，ジャンル，作曲家や演奏家，音楽活動，音楽史，音楽学などにおける視点から複合的に考えられている。これは，様々なカテゴリーとジェネレーションの聴衆に対して，色とりどりの，そして形の異なった，音楽へ通じる扉を準備しているということではないか。マルジェ氏の言葉『聴衆に対して，音楽へのアクセスの扉をできるだけ数多く開く』にある“扉”は，プログラム・テーマなのでもあろう。またマルジェ氏は音楽都市のイベントの多様性について『なぜこんなに多種多様なイベントを企画するのかというと，本当は音楽にはジャンルと呼ばれる境界線が無いということを証明したいからである。』と述べ，さらに『聴衆の好奇心は旺盛である。なぜなら，３つのイベントのチケットをまとめて購入すると割引が適用されるというシステムを導入したら，バロック音楽，世界の民族音楽と現代音楽というように，全く異なった３つのイベントを選択する人が多いという結果が出たからである。』と加えている。聴衆の音楽への健啖ぶりを物語っているといえる。

（２）プログラム・テーマとイベントの方式について

音楽へのアクセスの扉であるプログラム・テーマの一つを開けてみたら，そこにはどんなことが待ち受けているのであろうか。どんな方法でプログラム・テーマを掘り下げているのかを，いくつか例をあげて見てみる。

①の「古典派時代」というプログラム・テーマでは，1996年の10月４日から12月15日までの約

二ヵ期間に14のイベントが行なわれている。古典派時代を代表する作品の演奏に始まり，ハイドンがパリのコンセール・ド・ラ・ロージュ・オランピックからの依頼で作曲した交響曲 Hob. 82〜87の全曲演奏，当時の楽器を用いてのコンサート，古典派ソナタの誕生についてや，弦楽四重奏やオーケストラなど当時の楽器編成についての特徴を探るコンサート，ウイーン古典派についてのフォーラムなどサブ・タイトルを持つ多数のイベントで，古典派時代を多角的に紹介している。「ルネサンスのポリフォニー」では，スペイン，イタリア，フランス，フランドルなどのルネサンス音楽の比較や，モンテヴェルディのマドリガルなどイタリア・ルネサンス音楽の特徴を探るコンサートなど。

②の「アンダルシア地方の音楽」では，ツイガーヌやフラメンコなど民族的な音楽や楽器，歌と舞踏，そしてマニュエル・デ・ファリャの作品を紹介するなど。「中国の３つの宗教における音楽」では，テーマに関連する映画の上映に始まり，仏教，儒教，道教における宗教音楽の実演など。「ナポリの音楽ポートレート」では，16世紀のナポリで流行したヴィラネラ，アリアやダンス，ナポリ楽派のオペラ・ブッファ，ナポリ・バロック音楽や現代の作品を紹介するなど。いずれのテーマも５〜７つのイベントが組まれている。「アメリカ」においては，1997年11月から翌年の５月までの半年間に，アメリカの音楽に関連したイベントが約60回も行なわれ，シーズン全体でアメリカ音楽を取り上げた格好となっている。その他，「アフリカの声」「キューバの音楽」「中央アジアの音楽と舞踏」「サルディニアとコルシカの声楽音楽」「ブラジルの音楽」「大河の言葉：中央アフリカ共和国の音楽」など世界の音楽《musique du monde》の紹介にかなりの力を注いでいるが，今まで民族音楽学者の研究対象となっていたこれらの分野を，大衆に普及するねらいがあると考えられる。またこれらは，文献や論文だけでは解りづらい要素を最も多く有している音楽でもある。

③の「アコーデオンのテリトリー」では，多種多様のアコーデオン（全音階式，半音階式，鍵盤式，ジャズ，バンドネオン，他）を用いて，アイルランドやスコットランド，アルゼンチンなどの伝統的な音楽から現代の作品までを演奏。「音楽のマエストロ（世界のフルート）」では，インド，日本，イランなどの笛属の伝統楽器によるコンサート。「大発明（楽器の発展）」では，クラリネット（Buffet, Triébert, Ottensteiner），バスーン（Adler），サキソフォンやサキソホルン，ピアノフォルテ（Erard）やハーモニウムなどの古い型の楽器を用いて当時の作品を演奏するなどである。「19世紀の弦楽器製作の大家ヴュイローム：ヴァイオリン」では，スミソニアン研究所から特別許可を得て音楽ミュージアムで行なっている，ヴュイローム製作のヴァイオリン展覧会の開催と歩調を合わせている。

いずれにおいても一つのテーマを出発点に，色々な音楽に触れていけるようにプログラムが組まれている。マルジェ氏は『一つのテーマは，小さなフェスティヴァル《Mini-Festival》のような方式で取り上げていかなくてはならない。なぜなら，今日における音楽の普及は，大スターによる“一回の花火の打ち上げ”のようなイベントでは済まされない次元にあるからである。』と述べている。また，コンサートという方式だけではなく，映画上映《cinéma au

musée》，演奏家や作曲家との出会いの場《rencontre》，音楽フォーラム《forum musical》，討論会《colloque》，楽器研究セミナー《citéscopies, journées autour d'un instrument》，舞踏セミナー《jeudi de la cité de la musique, jeudi de la danse》，講演会《clefs d'écoute》，マスター・クラス《master-classe》，創作アトリエ《atelier de création》，アマチュアの舞台集合《tous en scène》，リハーサルの一般公開《répétition publique》など様々な方式を取り入れている。一つのテーマをコンサート，映画，出会いの場，フォーラム，講演会，セミナーなどを通して多角的に掘り下げていく方法を試みている。聴衆やアーティストの新たなニーズに応えるため，今までに行なわれていなかった方式を発掘しているといえる。これも聴衆に対して開かれた，音楽への新しい“扉”なのであろう。また，上述の方式はシーズンごとに変化を見せている。このことについてマルジェ氏は，『音楽都市は新しく取り入れた方式の固定化を試みているのではなく，都市の多様なセクターが一丸となって，聴衆にとっても，現在と未来のプロフェッショナルなアーティストにとっても，最も興味深い方式と音楽環境を，常に探し求めていかなくてはならないからである。』と述べている。

（3）イベントの開催時間について

コンサートというとマチネー公演を除き，夜になってから行なわれるのが一般的であるが，音楽都市におけるイベントの開催時間は，対象となる人々に合わせて様々である。月曜は休館日（教育メディアテックと現代音楽資料センターは開館）であり，イベントは何も行なわれていないが，それ以外の曜日に行なわれるコンサートは，日曜を除き通常午後8時の開演である。日曜のコンサートは午後3時あるいは4時30分に開演される。土曜は盛りだくさんの曜日であり，午前11時開演の青少年のためのコンサートや午後4時30分と8時というように，多数のコンサートが行なわれることがある。コンサート以外の主なイベントについては，音楽フォーラムや音楽学者，演奏家や作曲家との出会いの場が土曜の午後，教育セミナーが土曜や日曜の午前中に多い，舞踏セミナーや講演会が木曜の午後，マスター・クラスがウイークデーの午後に行なわれている。さらに，公演日程に合わせたリハーサルの一般公開や，二日から四日にわたる討論会やアトリエなどもある。夜のコンサート以外のイベントが土曜と日曜に集中しているが，音楽を求めて休日に音楽都市に訪れる人々への配慮である。音楽に接するということは，もはや夜になってから儀式的にコンサートへ訪れるということだけではなく，年齢や好みに応じてイベントに参加することでもあることを音楽都市は示しているのであろう。

（4）イベントの入場料について

さて，ここで気になるのはコンサートやイベントのチケット料金である。音楽都市で行なわれる催し物の多くが，国や地方自治体，財団や協会，オーケストラや演奏団体，ラジオ・フランス，フェスティヴァル，コンセルヴァトワールや教育機関，音楽メセナ，企業などとのコラボレーションで企画されているが，コンサートやイベントの料金はAからFの6つのカテゴ

リーに分けられている。1998年9月から1999年7月までのシーズンの料金体系を示す。

(1998年9月の為替レートは，1フラン＝23～24円の間を推移)

・大ホールおよび音楽ミュージアム円形劇場で行なわれるコンサートの各カテゴリーのチケット（一枚）料金（カッコ内は10人からの団体割引料金）

カテゴリーA　140～200フラン（170フラン）

カテゴリーB　100～160フラン（130フラン）

カテゴリーC　120フラン（100フラン）

カテゴリーD　80フラン（60フラン）

・青少年のため

カテゴリーE　60フラン（25フラン）

・すべての映画，音楽フォーラム，講演会

カテゴリーF　35フラン（20フラン）

・討論会やアトリエ，楽器シンポジウム

登録料および参加費　200フラン

1998年9月から1999年7月までのシーズンにおいて，カテゴリーAの催し物は7個，カテゴリーBは14個，カテゴリーCは35個，カテゴリーDは41個，カテゴリーEは7個，カテゴリーFは27個，そして無料の催し物（予約が必要）は27個となっている。カテゴリーC，DとFが多く，35フランから120フランの間でチケットが購入できるということは，より多くの催し物に対し庶民的な料金が設定されているといえる。また，カテゴリーAのコンサートでも，日曜の午後などにカテゴリーEの料金で，同じコンサートが青少年のために行なわれており，若い聴衆の育成に力を注いでいることがわかる。参考までに，各カテゴリーのコンサートの例を示す。

A料金：「ミョン・ファン・チョン指揮ヨーロッパ室内オーケストラ／モーツアルト，メンデルスゾーン」「ウイリアム・クリスティ指揮レ・ザール・フロリッサン／パーセル」「ピエール・ブーレーズ指揮二つのオーケストラ，フィルハーモニア・オーケストラとアンサンブル・アンテルコンタンポラン／シェーンベルク，マーラー」「ルネ・ヤコブス指揮フライブルガー・バロック・オーケストラ／ハイドン」など。

B料金：「ハンス・ゼンダー指揮アンサンブル・アンテルコンタンポラン／メシアン」「パアーヴォ・ベルグルント指揮ヨーロッパ室内オーケストラ／ブラームス，シベリウス」「ザルツブルグ・カメラータ・アカデミア／モーツアルト」「エサ＝ペッカ・サロネン指揮二つのオーケストラ，アンサンブル・アンテルコンタンポランとパリ管弦楽団／フェーデル，ドナトーニ，リンドバーグ，ヒンデミット」など。

C料金：「デヴィッド・ロバートソン指揮アンサンブル・アンテルコンタンポラン／ロペス，ジャレル，ベルク」「中央アジアの音楽と舞踏」「ピエール＝ローラン・エマール／ピアノ・リサイタル」「ジャーマン・ブラス／吹奏楽コンサート」「パリ管弦楽団のソリスト／ブラームス，

シェーンベルク」など。
D料金：「中国の3つの宗教における音楽」「シュロモ・ミンツ指揮パリ・コンセルヴァトワール・オーケストラ／ヴィヴァルディ，ラヴェル，ドビュッシー」「ヴュイロームとストラディヴァリの製作楽器／バッハ，ラウール，ブラームス」「ナポリのバロック音楽」「リンゼー弦楽四重奏団／ベートーヴェン」など。
E料金：「ミョン・ファン・チョン指揮ヨーロッパ室内オーケストラ／モーツアルト，メンデルスゾーン」「クリストフ・フォン・ドホナーニ指揮パリ管弦楽団／シューベルト，ヤナーチェック，現代曲初演」「デヴィッド・ロバートソン指揮アンサンブル・アンテルコンタンポラン／ヴァグナー，リゲティ」「スティーブ・ヴァーリング作曲による音楽スペクタクル」「クリストフ・エッフェンバッハ指揮パリ管弦楽団／ブラームス」など。
F料金：音楽フォーラム「ヴィオラ・ダモーレからヴィオラまで」「ピエール・シェフェールに捧ぐ」「発明家，写譜家ヴュイローム」など。その他，音楽都市のコンサートで上演される作品についての講演会（モーツアルトやベートーヴェン，リゲティ，メシアン，ブーレーズなどの作品について）。
無料：コンセルヴァトワールの学生によるコンサート，教育セミナー「音楽学校における唱歌教授法」「現代音楽，生命ある音楽？」，舞踏セミナー「舞踏と新しいテクノロジー」，音楽学者，演奏家，作曲家らとの出会いの場「中国の仏教音楽」「ジャズ・ナショナル・オーケストラ」「コルシカのポリフォニー」「中世の音楽における声と楽器」「変遷するナポリの芸術」など。
200フラン：討論会「原典からコピーまで」，アトリエ「舞台集合：声」，楽器シンポジウム「ヴィオラ」など。
上記のAからFのカテゴリー以外に，割引や特典のあるチケット購入方法が色々とある。

（5）インタラクティヴな音楽教育環境について

パリ国立高等コンセルヴァトワールは教育機関であるが，音楽都市の一セクターとして都市の活動に従事する役目を負っている。音楽都市の教育機関との結びつきは，当コンセルヴァトワールとだけではない。音楽都市は，初等教育や中等教育に従事している全国の教員や生徒に対しても，音楽教育における多様な提供を行なっている。この背景には，教員や音楽学校の講師から，音楽都市に対して様々な要求が寄せられていることがある。特に，初等教育や中等教育課程における通常の音楽の授業とは異なった音楽体験を望む声が高い。音楽都市がこれらのニーズに答えている様子をいくつか例にあげてみよう。まずI. P. M. C.《Institut professionel musical et chorégraphique＝音楽と舞踏専門研究所》の協力を得て行なった，教員に向けた音楽教育ガイドの充実があげられる。音楽教材やレパートリーの目録，年齢や難易度に応じた楽器ごとの教材やコンクールなどの情報の収集と公開である。次にあげられるのは，学んでいるジェネレーションによる音楽都市の利用を促進することである。最も一般的なのは音楽ミュージアムの利用であるが，ミュージアムでは幼稚園児から高校生までを対象に，一時間半から

二時間程度の講義と見学から成るコースを多数準備している。視力障害者を対象としたコースもある。また，楽器にアプローチする体験コースもあり，様々な楽器の音色に親しんだり，打楽器演奏（アフリカ，中東，アメリカなどの太鼓，ガムラン音楽の打楽器）を体験するなどが行なわれている。さらに，一日あるいは二日間を音楽都市で過ごし，音楽ミュージアムの見学に始まり，楽器体験，コンサートなど音楽都市における様々なイベントに参加するコースも設けられている。その他，音楽ミュージアムと音楽と舞踏情報センターの協力で，近隣の子供達によるアトリエが開かれている。子供達は三ヵ月の間，定期的に音楽都市に通い，楽器製作工房で自分達専用の楽器を作ったりしながらイベントを計画し，練習を重ね，最終的には衣装を着けて音楽都市の舞台で初演を行なうという，本格的な子供のための創作アトリエである。遠方に住む子供達（11～16歳）に対しては，文化教室《classe culturelle》という方法が取られている。一週間を目安とし，音楽都市で様々な体験学習をするという音楽科移動教室である。コンセルヴァトワールの学生が子供達を手伝いに来ることもよくあり，コンセルヴァトワール生の演奏による「子供のためのコンサート」も企画されている。この“未来の専門家”と“未来の聴衆”との出会いは，音楽都市が当初から最も意図していたことである。また，“未来の専門家”と“現在の専門家”の出会いの場は，アンサンブル・アンテルコンタンポランや世界的なオーケストラとコンセルヴァトワール・オーケストラの共同コンサートや，学生と著名な演奏家による共演などで実現されている。このような音楽都市の教育環境作りは，冒頭のマルジェ氏の言葉にある『学んでいる若いジェネレーション，第一線で活躍するプロフェッショナルなアーティスト，そして聴衆という３つのカテゴリーを結合する』の方針に沿って行なわれているのであろう。

まとめて

1997年11月に発行された雑誌《Femme　Actuelle＝現在の女性》に掲載された《Formation＝育成》と題する記事（ミッシェル・ベラン著）には，音楽都市の数々の試みに対して，『音楽と舞踏活動の活性を目的に，幼稚園や小学校に通う子供達のための音楽教育講座や，合唱の講座，大人のための音楽講座など150以上のアトリエが音楽都市で開催され，あらゆる人々を迎え入れている。教員，教育者や専門家などが，各々の専門分野における実践力を高めるのと同時に，新しい見地を切り開くことを可能にしている。……音楽療法や舞踏療法のアトリエは，看護者や運動療法士などで賑わった。……短期講座，週末講座，夏期講座，学期制や年度制の講座など，柔軟性のあるシステムは多様な人々のニーズに応えている。講座参加が研修として助成されることも多い。……』とあり，音楽都市の働きかけは，あらゆる人々を対象としていることが推察できる。共通項は音楽である。その音楽へのアクセスをより近く，より敏速にすることは，未来の音楽芸術に向けたフランス国民に対する投資であると言っても過言ではないであろう。

フランスのアマチュア芸術活動について

前半では，ヴィレット音楽都市における音楽に対する様々なアプローチの分析を試みた。後半では，フランス人の文化的な生活を享受する方法において，消費型の楽しみ方ではなく，参加型の楽しみ方について考えてみる。その代表的な方法であるアマチュア芸術活動への参加を例に取り，特に音楽におけるアマチュア活動について，その姿勢や支援体制などについての分析を試みる。

まず，フランスにおいてアマチュア《amateur》とはどのように定義されているのであろうか。フランス文化省総務局のリサーチによると，『15歳以上であり，楽器を演奏する，合唱団で歌う，ダンスをする，演劇をする，日記，詩や小説を書く，デッサンをする，彫刻する，絵を描くなど，音楽，演劇，舞踏，文学や造形美術などの分野において芸術活動を実践した者』とされている。さらにアマチュア活動家《amateur en activité》とは，『過去12ヵ月以内に芸術活動を実践している者』とある。継続して活動をということなのか，過去12ヵ月以内と線を引いているところが面白い。また15歳以上ということは，15歳までは何事も習得期間とみなされていると考えられる。まず，フランスのアマチュア活動家と呼ばれる人々の各年代における比率を見てみる。(フランス文化省総務局のリサーチのデータより)

「 15～19歳 44%，20～24歳 33%，25～34歳 20%，35～44歳 17%，
45～54歳 19%，55～64歳 18%，65歳～ 18% 」

アマチュア芸術活動は，20歳前の年代（15～19歳）が最も活発であることは明らかであるが，25歳以上の比率の変化があまり激しくないということは，25～34歳の年代に，アマチュア層の固定化があると思われる。社会人となることによっての時間の制約などで活動をあきらめる層がある一方，活動を継続する層が固定する傾向と，24歳くらいまでは複数の分野での活動を行なっていた層が一つの分野での活動に専念する傾向が推察できる。

次の表はどの分野で芸術活動の経験があるか，あるいはアマチュア活動家であるかを比率で示してある。

「

	器楽	声楽	演劇	舞踏	文学	造形美術
活動の経験がある	26%	13%	8%	11%	15%	17%
アマチュア活動家	8%	3%	1%	2%	6%	9% 」

分野別に見ると音楽（器楽と声楽）が最も人気が高いようであるが，実技訓練を日常的に必要とする分野ほど，単に活動の経験がある者とアマチュア活動家との比率に開きがある傾向が見られる。15歳未満のフランスの児童にとって，楽器を習うこととバレエ（特に女子）を習うことは最も親しまれている活動であるが，日本と同様に，青年期あるいはそれ以前に中断してしまうケースがほとんどである。しかし『音楽と舞踏におけるアマチュア活動家の10人のうち

7人までが，15歳になる前に習った経験のある者』とされ，アマチュア活動家とはいえ，若い年代に専門的な基礎教育を受けた者であると考えられる。次の表は，アマチュア活動を始めた年代の比率である。

「

	音楽	演劇	舞踏	文学	造形美術
15歳未満	62%	18%	41%	43%	47%
15～24歳	19%	40%	31%	35%	30%
25歳以上	19%	42%	28%	22%	23%

」

演劇を除いた分野で，アマチュア活動家の72～81%が24歳までに活動を始めていたことがわかる。また，41～62%が15歳未満に活動を始めており，若い年代における芸術体験が，後々のアマチュア活動の源になっているといえる。各分野との出合いの時期であるが，『幼少期に家庭環境の影響で習い始めることの多い音楽，思春期に興味を覚えることの多い絵画や文学，青年期に社交環境の影響で始める演劇やギター』とあり，これは日本も同様といえよう。しかし，『25歳以上になってから自分に的した新たな芸術活動を見つけるのは，どちらかというと稀である』とあり，その例外に『演劇，絵画，合唱』をあげている。演劇に関しては表の比率で明らかであるが，絵画については詳しい資料が無い。合唱については『合唱団や声楽アンサンブルで歌うことは，戦前生まれのジェネレーションにも最も親しまれている活動であり，それは現在の若者にも勝る』とある。日本でも合唱はさかんであり，特に合唱コンクール熱は高いが，フランスにおいて合唱は，最も日常的で習慣的な音楽活動と言われる。まず，フランス国民の多くがカトリック教徒であり，幼い頃から教会の礼拝で聖歌を合唱する習慣を持ち合わせていることがあげられる。宗教音楽のレコードは常に売り上げベストにあり，フランスにおいてこの分野に触れないで音楽を語ることは難しいが，合唱することが多くの人々の生活の一部にあるということは推察できる。フランスのアマチュア合唱活動について，次の項で分析を試みる。また，器楽や舞踏などでアマチュア活動を行なう人々の多くが，若い年代に専門的な教育を受ける機会を得た者とされるが，プロフェッショナルなアーティストとしての道を選択しなくても，アマチュアとして活動を行なっていく体制について，後の項で述べてみたい。

フランスのアマチュア合唱活動について

（1）地方多声音楽芸術センター《Centre régional d'art polyphonique》

音楽におけるアマチュア芸術活動のなかで最も幅広く親しまれている分野の一つに合唱による歌《chant choral》がある。この分野は，フランス文化省がその振興に力を注いでいる分野でもあり音楽舞踏局音楽遺産部門《Direction de la musique et de la danse-Département du patrimoine musical》が担当している。全国のいく千もの合唱協会は，県，地方そして国のレベルで組織化が行なわれている。アマチュア合唱活動の振興に貢献している機関に，地方多声

音楽芸術センター《Centre régional d'art polyphonique》がある。センター第1号の設立は1979年であるが，現在はコルス地方（コルシカ島）以外の21の地方（海外県と海外領土を除いたフランス本国は，22の地方に分割）にセンターが一つづつある。所在する地方（市）は，アルザス（ミュンスター），アキテンヌ（ボルドー），オーヴェルニュ（クレルモン・フェラン），ブルゴーニュ（ディジョン），ブルターニュ（レンヌ），フランス中部（モンルイ・シュール・ロワール），シャンパーニュ・アルデンヌ（シャロン・シュール・マルヌ），フランシュ・コンテ（ブザンソン），ラングドック・ルーシヨン（モンペリエ），リムーザン（リモージュ），ロレーヌ（メッツ），ミディ・ピレネ（トゥールーズ），ノール・パ・ド・カレ（リル），バス・ノルマンディ（カン），オート・ノルマンディ（ルーアン），ペイ・ド・ラ・ロワール（ナント），イル・ド・フランス（パリ），ピカルディ（アミアン），ポワトゥー・シャラント（ポワチエ），プロヴァンス・アルプ・コートダジュール（エクサン・プロヴァンス），ローヌ・アルプ（リヨン）である。フランス文化省音楽舞踏局発行誌“Mesures” Juin 1995-N° 32号によると，地方多声音楽芸術センターは設立当初，アマチュア合唱の芸術的および技術的水準を向上させることを目的とし，指揮者と団員の育成を主なる任務とした。しかし時間の経過とともにセンターの役割は拡大して行き，現在は声楽音楽における実践，養成と普及および地域的な文化開発を担う機関として，フランスの音楽活動に欠かせない存在となってきている。1995年には，国による地方多声音楽芸術センターのアウトライン要綱《document-cadre》が出され，国の希望するところのセンターの役割が明文化された。要綱によるとセンターの基本的な役割は，アマチュア合唱活動の振興を目的とするものであり，地域のアマチュア需要の分析に始まり，指揮者と団員の育成，活動環境の開拓，内容や方法の多様化を促進するなどである。基本的な役割が果たされた次元における副次的な役割は，地域の必要性に応じて，専門的な音楽教育や教員養成などに寄与することである。例えば，専門的な音楽教育機関においてD. E. M.《Diplôme d'études musicale＝音楽課程卒業証書》を取得するための課程や，音楽教員になるため必要な資格であるD. E.《Diplôme d'état＝国家資格》やC. A.《Certificat d'aptitude aux fonctions de professeur de musique＝音楽教師職能的確者証》を取得するための準備を，合唱，歌唱，声楽テクニックや合唱指揮など声楽音楽分野においてサポートすることである。さらに，プロフェッショナルな組織や多様な組織との音楽活動における結び付きや，大学や学校との養成活動における結び付きを強めていくことなどを求めている。

地方多声音楽芸術センターは，地域的な特徴と需要によって，それぞれの特色がかなり異なってくると思われるが，養成機関としての役割だけではなく，地域の声楽音楽活動の中継機関としての役割を果たすこともできるといえよう。声楽音楽という共通点で地域の多種多様な組織をネットワークで結ぶということは，アマチュア合唱にとどまらない音楽活動の流れを導いていくことと思われるのであり，それが狙いなのであろう。

次はパリ9区にある地方多声音楽芸術センターの一つである“イル・ド・フランス地方多声音楽芸術センター-ARIAM”の各コースにおけるカリキュラムを例にあげてみる。歌唱，合

唱，声楽教育法と音楽基礎教育，合唱指揮の４つのコースに分かれている。

歌唱コース

・夜間や週末に行なわれる大人向けのクラス（すべてのレベルで）

声楽テクニック，音楽基礎教育と初見法，歌手と伴奏ピアニストとの出会い，

週末合唱，ジャズ・ヴォーカル，グレゴリア聖歌，声楽室内楽，マスター・クラス。

・青少年のための“ナディア・ブーランジェ合唱団”

合唱団コース

・申し込みにより養成を実施

歌唱または音楽基礎教育における定期的な授業，テーマやレパートリー別の授業。

声楽教育法と音楽基礎教育コース

・入門者または教員のための継続的な養成

D. E.（国家資格）取得準備のための声楽テクニック，マスタークラスとの出会い，

ジャック・ダルクローズのリトミック，鍵盤楽器即興演奏法，合唱と音楽基礎教育。

合唱指揮コース

・すべてのレベルで

成人合唱および児童合唱指揮法，マスタークラス，声楽教育法，鍵盤楽器演奏法，

声楽音楽分析法，音響学と生理学，D. E. 取得準備のための声楽アンサンブル指揮法。

４つのコースにおけるカリキュラムは，地方多声音楽芸術センターのアウトライン要綱に沿ったものであることがわかる。カリキュラムの内容はいずれも専門的であり，また総合的な養成を行なっていることがわかる。さらに，夜間や週末の授業，申し込みにより養成を実施するなど，社会人の多様なニーズに適応するように配慮していることがわかる。

（２）地域のアマチュア合唱団

数多くあるアマチュア合唱団のなかでも，その活動がよく目にとまる存在に，地域の住民で構成される合唱団がある。多くの場合が，自治体の運営による専門的な音楽教育機関と密接な関係を持っている。在仏中に知り合ったあるアマチュア合唱団を例にあげてみたい。

イル・ド・フランス地方の南部にあるエッソンヌ県に，人口約１万３千人のジュヴィジー・シュール・オルジュという町がある。1988年に，ジュヴィジー・シュール・オルジュ町の委嘱で，金管五重奏，打楽器，弦楽オーケストラと合唱のための作品を作曲したことがある。ジュヴィジー・シュール・オルジュ町には，自治体の運営による音楽教育機関であるマリウス・コンスタン音楽センター《Centre musical Marius Constant》がある。センターは全国に246校あるE. M. M. A.《Ecole municipale de musique agréée＝文化省公認の市町村の音楽学校》の一つであり，町民のための専門的な音楽教育が行なわれており，また町民の音楽活動の拠点ともなっている。［フランスの音楽教育機関の簡単な全体像については末尾を参照。］委嘱作品は，ジュヴィジー・シュール・オルジュの弦楽オーケストラと合唱団が中心となって“エッソ

ンヌ県第3回音楽と舞踏の創作ビエンナーレ”で初演する目的で企画された。弦楽オーケストラは，マリウス・コンスタン音楽センターで弦楽器奏法を学んでいる青少年で構成され，合唱団は地域の住民で構成される大人のアマチュア合唱団である。金管五重奏と打楽器の演奏はプロフェッショナルであるアルス・ノヴァ・アンサンブルに委託された。全編成の取りまとめ役はセンター長を兼任する指揮者である。初演の6ヵ月前に作品が仕上がることを約束しなくてはならなかったが，これは合唱団が半年かけて練習するためであった。定期的な練習はウイークデーの午後10時から行なわれ，夜遅くであるが，合唱愛好家達が町の他目的ホールに続々と集まって来る。高齢者も夫婦での参加も多い。頑張って歌うというのではなく，リラックスして外国人の作曲した現代曲に挑む。現代音楽独特の響きや緊張感に驚くこともなく，集団で異国情緒を楽しむ余裕さえも持ち合わせている。練習は音楽作品を味わい消化するためであり，それは文化的な生活の楽しみ方の一つなのであろう。修行中の身である弦楽オーケストラは初演の3ヵ月前に練習に加わったが，プロフェッショナルであるアルス・ノヴァ金管五重奏と打楽器が練習に加わったのは最後の3回の練習であった。こうして，学生とアマチュアとプロフェッショナルから成る年齢層の厚い集団が一つの音楽創作を初演するに至った。地域の音楽ネットワークがもたらした熱気に満ちた初演は，学生かアマチュアか，あるいはプロフェッショナルかというカテゴリーを通り超した音楽的な次元にあった。音楽活動の原点を顧みるきっかけになったといっても過言ではない。

(3) メトリーズ《maîtrise》合唱団

フランスの合唱活動を語る上で忘れてはならないのが，メトリーズ《maîtrise》と呼ばれる聖歌隊の存在である。メトリーズは，14世紀以降フランスやベルギーで広まった教会や聖堂に専属する児童合唱団であった。入団はコンクールで決定され，児童の扶養や教育は教会が責任を持った。教会の典礼を勤めながら，音楽（声楽と器楽）の他，文法，文学，ラテン語などを学んだとされる。児童の年齢は教会や時代によって多少異なるが，4歳から13歳くらいまでが多く，卒団するとプロフェッショナルな音楽家になるケースが多かった。当時は，児童に音楽教育を行なう唯一の機関であり，フランスにおいてはエクサン・プロヴァンス，ブールジュ，カンブレ，シャルトル，クレルモン，ディジョン，パリ（ノートル・ダム），ルーアンなどの教会のメトリーズが有名であった。プサルテット《psaltette》，マネカントリ《manécanterie》，シャペル《chapelle》などとも呼ばれた。フランス革命後の1791年に廃止されるが，その教育精神はコンセルヴァトワールによって引き継がれたとされる。

以後，時代とともに復活されていくメトリーズであるが，かつてのメトリーズとは構造を異にする。現代のメトリーズを2つ例にあげてみたい。

やはり在仏中のことであるが，ラジオ・フランスの委嘱で合唱作品を作曲する折に，ラジオ・フランス・メトリーズ合唱団と知り合った。ラジオ・フランスのメトリーズは，1946年にアンリー・バローによって設立された放送局専属の少女合唱団であり，その任務は教会の典礼

を勤めることではなく，現代音楽の初演とフランス合唱音楽のレパートリーの普及に貢献することである。ラジオ・フランスのコンサートや録音，その他諸々のイベントへの参加を役目とする。特に現代音楽の初演活動においては国際的なレベルにある。当メトリーズは，音楽教育と一般教育を並行して受けるための半日教育《mi-temps pédagogique》のシステムを取り入れた先駆的な存在であった。午前中は一般教育機関で学び，午後には専門的な音楽教育（合唱，ソルフェージュ，和声分析，多声音楽，声楽技術など）を受けるという教育システムである。[現在は，一般教育と音楽や舞踏教育を並行して受ける者に対して，時間的な配慮を行なう時間割調整制度《classe à horaire aménagé》が数多くの教育機関で実施されている。]

もう一つ，現在のメトリーズの例として，シャルトルのクラス・メトリジェンヌ合唱団《classes maîtrisiennnes》をあげたい。シャルトルにはパリのノートル・ダム寺院と並ぶゴチック建築の大聖堂があり，メトリーズの歴史は中世にさかのぼる。クラス・メトリジェンヌは，シャルトル国立音楽舞踏学校とユール・エ・ロワール県アカデミー監督局の主導で設立された少年少女合唱団である。団員は一般教育機関に通学しながらシャルトル国立音楽舞踏学校で合唱を中心とした専門的な音楽教育を徹底的に受ける。ラジオ・フランスのメトリーズと同様，典礼における役目は持たず，フランス音楽を中心とした宗教音楽を含むあらゆる時代のレパートリーをこなす。古都シャルトルに音楽的な活力を与える役目を負っている。また，シャルトルは日本の奈良県桜井市と姉妹都市であり，国際交流においてもクラス・メトリジェンヌが力を発揮していることを付け加えておきたい。

少年少女の鍛え抜かれた清らかな歌声が，最も感動的な音楽シーンを演じ続けてきていることは，だれも疑わないであろう。ラジオ・フランスのメトリーズおよびシャルトルのクラス・メトリジェンヌは，いずれも典礼における役目こそ持たないが（宗教曲を歌わないということではない），フランスの音楽遺産を継承し，また新たな遺産を創造していくということにおいて，社会的な役目を負っているといっても過言ではないであろう。

フランスのアマチュア器楽活動について

アマチュア器楽実践センター《Centre de pratique instrumentale amateur＝Cepia》

吹奏楽学校《Harmonie-école》とファンファーレ学校《Fanfare-école》

合唱と同様に，文化省音楽舞踏局音楽遺産部門はアマチュア器楽活動の振興にも力を注いでいる。地方多声音楽芸術センターのように全国の各地方に一つづつ設置されているのではないが，全国にアマチュア器楽実践センター《Centre de pratique instrumentale amateur＝Cepia》が10ヶ所，および吹奏楽学校《Harmonie-école》とファンファーレ学校《Fanfare-école》が9校ある。アマチュア器楽実践センターでは，プロフェッショナルな音楽家やアマチュア連盟や協会の主導のもとに室内楽や合奏の指導が行なわれている。吹奏楽学校とファンファーレ学校では吹奏楽指揮者の養成と器楽の実技指導が行なわれている。いずれもアマチュア器楽活

動における技術的および芸術的レベルの向上を目的としている。その他フランスには，委嘱-使命《commandes-missions》と呼ばれるシステムがある。これはアマチュア器楽アンサンブルが新作の初演を行なうために，国が作曲家に作品の委嘱を行ない，アマチュア器楽活動家における教育的な効果と，作曲家の創作活動の活性を促すことを目的としたシステムである。

音楽と舞踏におけるアマチュア育成の体制について

音楽および舞踏の分野でアマチュア活動を行なう人々の多くは，若い年代に専門的な教育を受ける機会を得た者であるが，その中には地域のコンセルヴァトワールや音楽学校に通っていた者が少なくない。［フランスの音楽教育機関の簡単な全体像については末尾を参照。］パリとリヨンにある2つの国立高等コンセルヴァトワールは，プロフェッショナルを養成するエリート校であるが，国立地方コンセルヴァトワール，国立音楽学校，文化省公認の市町村の音楽学校などは，より庶民的な音楽教育機関（国，地方，県から助成を受けているが，運営費の約80％は所轄の自治体が負担）である。これらの自治体の音楽教育機関に対し，国から教育機構に関する指導概要《Schéma directeur》が出されており，そこにはプロフェッショナルな音楽家の養成だけではなく，アマチュア音楽家の養成を目的とした教育的使命も明確にされている。国立地方コンセルヴァトワール，国立音楽学校，文化省公認の市町村の音楽学校における教育課程は3課程からなり，第1課程に入る前の目覚め課程と第3課程に続く専攻課程の設置も認めている。学習期間は音楽教育機関によって多少は異なるが，第1と第2課程がそれぞれ4年間，第3課程と専攻課程がそれぞれ3年間が平均であり，学生の進度に応じて学習期間の短縮や延長も認めているが，達成レベルによる進級制度がとられている。学生の年齢制限はコースや課程によって異なるが，総合すると5歳前後から30歳前後までとなり，年齢層は幅広い。また，指導概要には各課程の必修科目，授業や演習時間，目標が記されている。音楽コースにおける目標を例にあげてみると，第1課程においては，音楽の実践や音楽という思考概念に親しんだり，音楽の概念を表わす記号体系を教わりながら，音楽表現を体験させることを目標としている。第2課程においては，団体での演奏形態において，アマチュア・レベルの熟練を目標としており，また，個人的なレベルの向上と音楽的な自立を導く可能性を示唆している。第3課程では，技巧的な熟練と幅広い音楽教養の習得を目標とし，将来，プロッフェショナルな音楽活動を目指すか，あるいはアマチュアとしての活動を行うかの選択ができるレベルの達成を目標としている。どの課程も音楽基礎教育，個人実技演習と団体実技演習を必修科目としているが，個人的な実技レベルがそれほど高くない第1課程から，団体での演習（合唱，オーケストラ，室内楽，声楽あるいは器楽アンサンブル）を必修とし，集団による音楽表現方法の習得に力を入れている点が興味深い。早い時期から団体の中で，音楽を通して自己表現を行なうということは，音楽が社会的な表現の一つでもあるということを，体験を持って学んでいると言えないであろうか。第3課程修了資格として，C. F. E. M.《Certificat de fin

d'études musicales＝音楽課程修了証書》と，より取得が難しい音楽D. E. M.《Diplôme d'études musicales＝音楽課程卒業証書》の2つがあるが，前者の音楽課程修了証書は，アマチュア音楽家を証明する資格とも呼ばれている。つまり多くのアマチュア音楽家が専門的な音楽教育を継続的に受け，有資格者であると推察することができる。また，第2課程修了者で第3課程に進まない者に対し，所属の音楽教育機関での音楽活動や，機関と関連したアマチュア音楽団体や組織での活動への道が開かれている。プロフェッショナルかあるいはアマチュアかということが重要なのではなく，いかに音楽活動を行なって行くかということの方が重要なのであろう。

国立地方コンセルヴァトワール，国立音楽学校，文化省公認の市町村の音楽学校の多くが，舞踏コースを有しており，音楽と同様に進度に応じた課程編成が組まれているが，音楽と比べて各課程の年齢制限が厳格である。平均的な身体発育を重視しているためと思われる。また，比較的に早い時期に，D. E. C.《Diplôme d'études chorégraphiques＝舞踏課程卒業証書》の取得を目指す特進コースか，C. F. E. C.《Certificat de fin d'études chorégraphiques＝舞踏課程修了証書》の取得を目指す一般コースかのどちらかを選択するかを決定しなくてはならないシステムを導入しているところがある。特進コースはより専門的であるとされるが，一般コースと決定的に異なることは，舞踏の実技演習時間数が一般コースと比べて多いということである。これは，自宅で練習が可能な音楽とは異なり，コンセルヴァトワールや音楽学校での実技演習時間数が進度を決定づける要素になり得るためである。しかし，日常的にどの程度の時間数を舞踏に費やすことができるかで，コースの選択ができるということは，進路決定においても重要なことである。

音楽および舞踏の教育機関の特色をいくつかあげてみたが，これらの機関が未来のプロフェッショナルなアーティストに限らず，未来のアマチュアの育成にも貢献していることが見えたようである。

おわりに

前半でヴィレット音楽都市の姿を，後半でフランスのアマチュア音楽活動についての分析を試みた。かけ離れている二つのテーマであったが，共通点としてまずあげられることは，国民が音楽を享受することにおいて，国が大きく関わっているということである。フランスにおける国の芸術メセナぶりは他国に類がないといえる。しかし，過去の音楽遺産を譲り受け，普及し，新たに産みだ出し，それらを未来へ伝達するということは容易なことではなく，その伝達者である“未来の専門家”と“未来の聴衆”が無くしては，音楽芸術を誇れる未来は得られないということなのであろう。また彼らは，伝達するということは活動することであるという認識を持っているということを強く感じさせられた。

（本学講師＝作曲担当）

参考文献及び引用データ

1）Dominique et Michèle FREMY 共著 Quid1996／Robert LAFONT 出版
2）Cité de la musique／Connaissance des Arts 出版
3）Cité de la musique-programme octobre 1996-août 1997／Cité de la musique 発行
4）Cité de la musique-programme septembre 1997-juillet 1998／Cité de la musique 発行
5）Cité de la musique-programme septembre 1998-juillet 1999／Cité de la musique 発行
6）Cité de la musique activités pédagogiques scolaires et centre de loisir saison 98/99／フランス文化省（通信）発行
7）Journal de la cité de la musique-Cité Musiques Eté 1998 N° 19／Cité de la musique 発行
8）La musique Etat et Culture／La Documentation Française 出版
9）musique・danse／フランス文化省（フランス語圏）発行
10）Direction de la musique et de la danse／フランス文化省音楽局発行
11）Développement culturel（Les activités artistique amateur ）N° 109-mars 1996／フランス文化省総務局発行
12）Mesures...（Le schéma d'orientation pédagogique des écoles de musique et de la danse）Décembre 1997-n° 46／フランス文化省（通信）発行
13）Mesures...（La pratique chorale et vocale amateur-La mission des centres d'art polyphonique）Juin 1995-n° 32／フランス文化省音楽局発行
14）Les concerts de Radio France 1998-99／ラジオ・フランス発行
15）ARIAM Ile-de-France Centre d'art polyphonique-programme 98/99／ARIAM 発行
15）Larousse de la musique／ラルース書店
16）標準音楽辞典／音楽之友社

フランスの専門的な教育機関-コンセルヴァトワールと音楽学校について

1997年7月のヴィレット音楽都市図書館のデータによると，フランスにおいて約3000の市町村や区に最低1校の音楽学校（公立と私立）があり，その総数は約4300校とある。これらの音楽学校において，約4万人の音楽教師が約75万人の生徒に対し，音楽，舞踏や演劇の指導を行っているとある（地域の文化センター，個人的な教室，個人教授は含まず）。地域的な格差はあるが，フランス全土の初等および中等教育を受けている生徒の約7.5%が専門的な音楽教育機関に所属していることとなっている。これらを分類してみると，

・国立高等音楽コンセルヴァトワール（CNSM＝Conservatoire national supérieur de musique）が2校
・国立地方コンセルヴァトワール（CNR＝Conservatoire national de région）が32校
・国立音楽学校（EMN＝Ecole nationale de musique）が106校
・文化省公認の市町村の音楽学校（Ecole municipale de musique agrée）が246校
・文化省非公認の市町村の音楽学校（Ecole municipale de musique non agrée）が約1000校
・パリ市の区のコンセルヴァトワール（Conservatoire municipal d'arrondissement）が20校
・私立音楽学校（Ecole privée）が約3000校となっている。